

# 竹林整備デー

## —都市住民と地元住民協働による取組

鹿嶋與一

NPO 法人竹もりの里 代表理事

〒 297-0102 千葉県長生郡長南町本台 658-1

Tel 0475-47-4348 Fax 0475-47-4413 E-mail : info@takemori.org

### ■ 里山を蘇らせたい

千葉県の房総半島には、標高は低いものの谷深い山地と平坦な土地があり、気候は温暖で、生活の場として多くの里山が残されています。首都圏からのアクセス条件に恵まれないながらも、都市型社会では触れることのできない豊かな自然環境が数多く存在しています。里山は古くから人々の暮らしと調和し、ここで暮らす人の手で守られてきました。

この里山が生活様式の変化と共に資源として活用されず放置され、住居の裏山には倒木と朽ちた竹が折り重なり、人を寄せ付けない状況となっている場所があるのです。「昔の里山は本当に綺麗だった。けれども今は山が荒れて泣いている」。地元で暮らす人から聞いたのですが、おそらく素直な気持ちでしょう。

美しく、しなやかな竹は、農業用資材や建築資材、工芸品、竹細工として日常生活に大いに利用されてきたわけですが、高齢化と人口減少によって里山の保全が危ぶまれています。「竹の有効利用を考え、里山を蘇らせたい」。私はそれを目的として、NPO 法人竹もりの里を、2010年9月に発足したのでした。

### ■ ご縁—竹の事業化を考える研修会

私は60歳でサラリーマン生活に終止符を打ち、それまでとは違った生き方を模索していました。放置竹林問題を情報誌で知り、子どもの頃から慣れ親しんだ竹を何とか活用できないだろうかと考え始めたのです。そんな折、千葉県長生郡長南町で、竹の事業化を考える研修会が開催されると聞き、竹問題に関心が深まっていたところでもあり参加してみたのです。地元の方々との親交が深まるご縁となったことは言うまでもありません。

### ■ 大切なこと—地元の皆さんとの協働

さて、設立当初は私自身、竹林整備の経験もなく技術も未熟で、知らない土地で活動拠点を探しだすことすら難しい状況でしたが、地元の皆さんと一緒に作業をし、汗を流し、技術を学ぶことで、人との繋がりが徐々にできていったのです。地元で暮らす皆さんは子どもの頃から里山で遊び、山で生活する知恵を持ち、地元でのネットワークがありました。新たな活動に取り組む時には独善的な考えに陥らないよう心がけ、お互いに情報交換をし

ながら進めていくことが重要だと感じました。

そんな一例をお話しします。以前、耕作放棄地の谷津田再生事業に取り組んだことがあります。長年放棄された水田の雑木を伐倒し開墾、水路を確保して無農薬栽培の米づくり挑戦しました。谷津田再生は都市住民から多くの賛同者を得て、大勢の人が手伝いに来てくれましたが、地元の参加者が少なくなり、いつの間にか、自分たちだけが楽しんでいける雰囲気となってしまったのです。都市住民との交流を念頭に置いたつもりが、経験不足と技術不足のため些細な苦情も聞かれるようになり、一旦、仕切り直しを決めました。地元の協力を得ながら進めることがいかに大切かと、貴重な体験をしました。

## 竹林整備デー

国内の環境問題を私なりに考えると、①温暖化、②森林資源の崩壊、③近海漁業の低迷、④里山の疲弊などが挙げられ、それらすべてに竹林の荒廃が絡んでいると思うのです。竹林の適切な管理は、①二酸化炭素の吸収、②有用な森林資源の保護、③森林がもたらす栄養分、④生物多様性の保全、などに直接、間接に結び付いて、国土に良い影響をもたらすと考えています。

私たちの活動地域である千葉県長生郡には、里山として民有地が多くあります。竹の有効活用と里山再生を目指すには活動拠点が必要でした。地権者との合意も必須です。交渉に当たっては、地元の協力して下さる方々のお力が大きいものでした。スムーズに事が運び、問題を解決したい時にも相談できる良き相棒となっていきました。

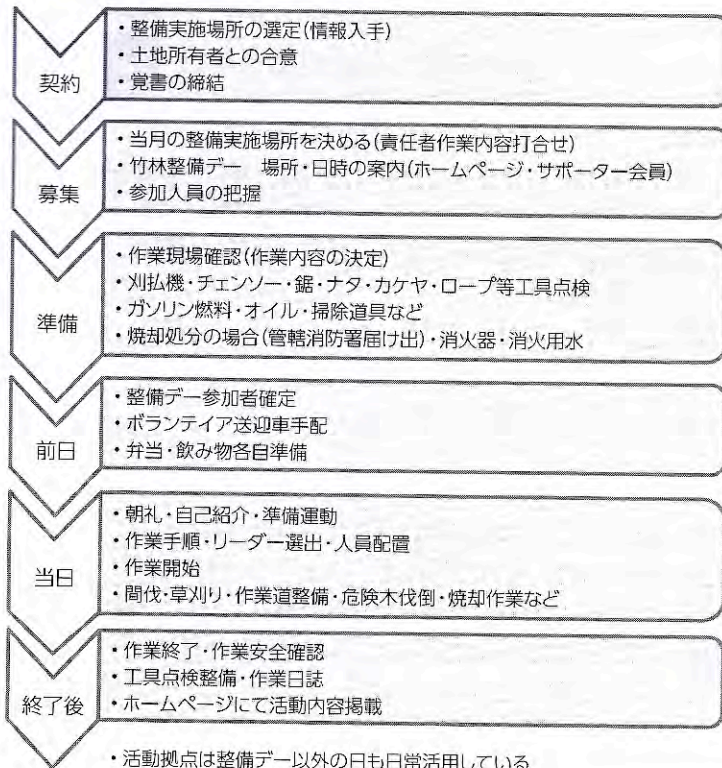
竹林は長期間の管理が必要となるため覚書を交わし、活動の妨げにならないよう双方納得した内容としました。2013年1月から始まった「竹林整備デー」は今年5月で41回目を終えました。当初、竹林整備は地元の強力なシニアメンバーと私たち会員同士で不定期に、互いの日程を調整しながら行っていましたが、定期的に第3土曜日を活動日に決めたことで予定が立てやすくなり、参加者も増えてきました。参加者は県外の方も多く、遠くは新潟、群馬、埼玉、山梨県からも来られます。放置竹林問題を抱え何とかしたいとの意気込みの表れだと思います。

実際の作業では安全面に最も注意すべきことは言うまでもありません。ある程度作業に慣れた人が実は最も安全に気をつけなければなりません。こう作業すればきっとこうなるはずだ、という思い込みが最も危険なのです。竹は軽くて、作業上の危険性がスギなどに比べれば少ないだろうと思われがちですが、粘りがあり予測不能の動きをすることがしばしば起こります。私たちが最も参加者の皆さんに気をつけるよう呼びかけている事柄の一つです。安全講習会修了者はチェーンソーを使い、初心者のはのこボランティア参加者は鋸で作業します。竹林整備デーを開催するつど、事務局が裏方として動いているその大まかな流れを次頁の図①にまとめてみました。作業の様子も各スナップ写真をご覧下さい。

## 面積だけでは推し量れない手ごわさ

さて、長生郡町村の竹林面積は統計上298ha、最新のGIS（地理情報システム）による画像解析の結果によると507haと報告されています。当法人は約12haの竹林を管理していますが、この地域の他の竹林は放置された状態で、荒れてとても手に負えない状況です。



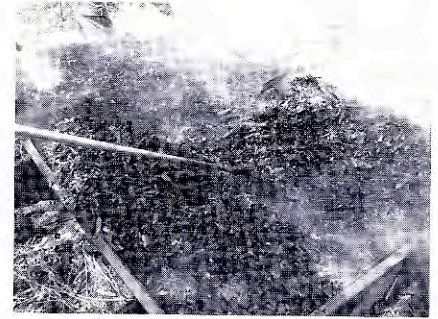


・活動拠点は整備デー以外の日も日常活用している

▲図① 竹林整備デーの裏方工程表



▲整備しながら竹炭作り



▲軽トラ一杯の竹炭ができました。

竹の厄介なところは、毎年整備を続けなければすぐに元に戻ってしまうことだと実感しています。竹林と森林の棲み分けを図り、それ以外は枯渴させることに取り組まないと解決できないのかもしれませんが。特に河川沿いに生えている真竹の勢いは凄まじく、川面に垂れ下がり流れをせき止め、洪水のたびに海岸線に打ち上げられ散乱するような状態です。これらは手が付けられず放置されているのが現状で、有効活用しながら再生することが望ましいと思われます。

## 里山の再生を推進するために

竹材を活かしてこそ放置竹林問題は解決できるのではないかと感じています。整備された竹林では筍の出荷が可能となります。私たちの活動でも、この時期には筍が一時的な収入をもたらしてくれるので、それを活動資金としています。竹を大量に消費するには他の用途開発を進めなければならないと思います。当法人では、他の団体と協働して竹の炭化に取り組んできました。竹林整備では大量の枯れ竹と間伐竹を処理しなければなりません。竹は空洞で燃料としては不向きと言われますが、短時間に炭化させるにはむしろ好都合な素材です。現地で安全に処理するため、大型の炭化炉を開発しました。一度にたくさんの竹炭(消し炭)を製造しコストを大幅に下げること、他分野に活用されることを模索しています。

竹林の整備や利活用の普及拡大を図るためには行政、大学、研究機関、農業従事者など関連する関係者が一堂に会して討論する機会が必要ではないかと感じ、千葉県、茨城県内において竹炭シンポジウムを開催してきました。そこでの議論から、残された課題もいく



▶ヘルトスリングを用いた竹林の間伐作業は大変便利で安全に作業できます。



▲竹林整備で竹材を野焼き



▲作業用道路が完成



▲人力による間伐作業



▲全体の中央、前列のヘルメット姿が筆者です。

つか明らかにされ、これから具体的な活動に取り組んでいこうと思います。

最近、農林業の廃棄物、廃材、食品廃棄物を活用したバイオ炭が世界的に注目されつつあり、ネット上でも多くの情報が検索できるようになりました。竹は他のバイオマス資源に比べ簡単に炭化させることができ、炭（炭素）として利用することで半永久的に地中に固定、温室効果ガスの二酸化炭素削減に繋がると考えています。間伐竹は樹木粉碎機で細かく粉碎し、農業用土壌改良材として活用することで、大量の消費が見込まれます。今後の普及拡大を図るには竹炭、竹粉などいずれの場合も安定供給と製造コストの低減化がポイントでしょう。バイオマス資源として活用していくため、竹資源利用事業推進に向けた支援が必要となっていくことでしょう。

## まとめ

竹林整備に参加された方は、竹が散乱した状況から人の手が入り綺麗になった竹林を見て達成感を持たれます。清々しい顔を拜見すればよく分かります。竹林整備デー開催当初から手弁当で通っている方もいて、頼もしいかぎりです。

作業を安全に行うためには参加者の技能向上も大切で、チェーンソー、刈払機の安全講習を実施してきました。ボランティアとして参加した皆さんがスキルを磨き、指導者として活躍してもらえたら本当にうれしいことです。

1回限りの参加ではこちらも教えきれずに残念ですが、放置竹林に関心を持っていただいたことは大感激です。切っても切っても切りがない竹が無尽蔵にあるように感じていますが、いつかこの地域で放置竹林問題が解消され、里山が見違えるように綺麗な姿に再生される日が来ることを信じ、活動を続けています。

(かしま よいち)